就業力育成支援事業　近畿地域会議
～課題討議・情報共有～
〈全体会議(2)－総括〉

日　時：2011 年６月８日（水）17：10～17：30
会　場：キャンパスプラザ京都　２階ホール

■全体での情報共有

○司会（林）　皆さん、たいへんお疲れさまでした。
　この会場で最後のプログラムに入りたいと思います。ここでは全体の情報共有といたしまして、各部会の討議状況報告、ならびに事業委員会の委員の先生方からの総括講評をいただきます。

〔討議状況報告－分科会Ａ〕
○司会　はじめに、分科会Ａ会場の討議状況の報告を能見正様よりお願いしたいと思います。よろしくお願いします。
●能見（文部科学省）　それでは、Ａグループの分科会の状況を、簡単にご紹介させていただきます。
　Ａグループにつきましては、討議事項ということで、まず１つ目の議題として「円滑な事業推進に向けた学内協力体制の確保」、それから２つ目に「ポートフォリオ、ｅ－ラーニング、その他システムの運用・活用等」、その２つについて議論をいただきました。
　３つ目に「成果をどう測定するか」を議論する予定でしたが、時間の都合上、今回はそこまでできませんでした。
　出ていた意見をいくつか、ご紹介します。
　１つ目は、キーパーソンを見つけることが必要であるということ。よく考えている先生は必ずいる。そういった先生をまずつかまえる。
　また、実際に取組に携わる教員の心理的な負担を減らす工夫が大切である。取組みを実際に進めていくことはそれほど大変なことじゃないということを、うまく伝え、理解していただく、そういう努力も必要である。
　あるいは、仕組みを変えていかないと、意識の改革はどうしてもできない、など。
　最終的には各大学で、大学として取り組んでいかなければ、進めていくのは

なかなかむずかしい。結局は大学の事情や状況に応じて、それぞれが努力してやっていかざるを得ない。

２つ目は、ｅ－ラーニング、ポートフォリオについて、いろいろと意見交換を行いました。

教育現場におけるＷｅｂに対するアレルギーがあるとか、とくにポートフォリオのところでいろいろとご意見をいただきましたが、たまたまＡグループのなかでは、ポートフォリオで非常に先進的な事例をもっておられるところがなかったのですが、問題例というか、うまくいかない例ということで、ご意見、お話を少しうかがうことができております。

その１つとして、ポートフォリオシステムへのアクセスの権限といったものが、実はかなり重要だということをおっしゃった大学さんがありました。具体的には、閲覧権限の問題です。たとえばすべての教員がそれを見られるようにしてしまうと、かなり問題が起きるというお話がありました。すべての教員が見られるということは、関係ない先生まで見てしまう点で、うまくいかない点が課題なのではいないか、というお話をされた人がいました。

それから、ポートフォリオシステムをどういうかたちで活用していくか、あるいは運用していくかという点について、基本的にはやはり目的によって仕組みが異なるので、なかなか他のいい事例を真似するというのは、単純にはいかないんじゃないかというご意見等々ございました。そのほかｅ－ラーニングの関係で、いくつかの意見交換をしております。

全般的に、時間が 50 分しかないなかで、なかなか全部の議論を尽くせなかったというのが正直なところです。

できれば再度、引き続き議論をしていく必要があるように思っています。Ａグループでは、議論の答えを出すことを求めたわけではありません。あくまで今回はいろいろな意見を出し合って、自由にディスカッションしていただくという趣旨でやっております。

Ａグループの概要は以上でございます。

○司会　ありがとうございました。

〔討議状況報告－分科会Ｂ〕

○司会　続きまして、Ｂ会場は、同じく文部科学省の高等教育局専門教育課 教育振興係長の小栗孝明様よりお願いいたします。

●小栗（文部科学省）　Ｂグループを担当させていただきました小栗でございます。

Ｂグループでは主に、「学内協力体制」、「学生参加の促進」、及び「実施成果の測定」について討議をいたしました。

まず、学内協力体制について。各大学の皆様、協力体制をつくるために苦労していらっしゃるということでしたが、特に、この事業のために組織を作って、その中でしっかりと議論をして、先生方や事務局の意識を固めていった事例や、人材をこのために募集して、うまく機能させていったというような事例をいくつかご紹介いただきました。

次に、学生の参加の促進では、おもしろい意見がいくつか出ていました。その中でも、学生をテキストづくりに参加させるとか、次の年に、自分たちの後輩を対象とした企画の立案等を全て、今年参加した学生に任せるなど、学生にある程度権限を与えて、企画させることにより、学生が積極的に参加するようになったという取組をしている大学の話が印象に残りました。

それから、ポートフォリオについてはあまり触れませんでしたが、そういったものにうまく学生を参加させる工夫として、若者がよく利用しているようなＳＮＳ風のシステムを導入し、参加することによってシステム内の自分の分身キャラクターを成長させるような事例の紹介がありました。ちょっとゲームみたいなシステムといえばそうかもしれませんが、学生をひきつける方法としてなかなかおもしろいアイデアかなと思いました。

実施成果をどう測定するかというのは、各大学でいろいろとお悩みのところがありましたが、Ｂグループに参加いただいていた関西外国語大学さんから、今年度から取り組んでいらっしゃる評価の方法について具体的な例を紹介いただき、他の大学の方からもそのことについて質問が多く寄せられ、なかなか盛り上がりました。

Ｂグループの分科会報告は以上でございます。

○司会　ありがとうございました。

〔総括講評〕

○司会　続きまして、総括講評をお２人の委員の先生方にお願いしたいと思います。

分科会Ａについては、荻上紘一様よりお願いいたします。

●荻上　総括講評という大げさなことを申しあげるほどの材料をもちあわせておりませんが、ひと言申しあげます。

各大学、順調にスタートをお切りになったと感じました。このまま５年間、さらに事業への取組を進めていただいて、５年後には各大学から就業力にあふれた人材が輩出するようになることを期待したいと思います。

そもそも、なぜこんな取組を、プログラムを始めたかということですが、発端はニートがたくさんいるとか、あるいは早期離職が多いといったことだったわけです。ご存じのように設置基準を改正するときに、中教審で議論したわけですが、かなりの大学から反発がありました。「そんなことはとっくに、自分の大学ではやっている。なぜいまさらそんな設置基準の改正などするんだ」と。すでにおやりになっていらっしゃるのはたいへん結構ですが、しかし残念ながらニートが多いとか、あるいは早期離職者が多いといった現実があったわけです。なんといってもやはり十分に、社会的・職業的に自立していく力が身についていない卒業生が、大学から相当数輩出されているというのは、現実として受けとめざるを得なかったというふうに思っております。

そういうわけで、あのような設置基準の改正などが行なわれたわけですが、この事業は、そういう若者を世の中に出さないように、各大学でしっかりと取り組んでくださいという趣旨でございますので、単に就職率を上げればいいというように考えていただきたくないと私は思います。ある意味で就職率を上げるのは、その気になればできることだと思います。しかし単に就職率を上げても、その学生たちに「就業力」がしっかり身についていなければ、じきに辞めてしまう。働くことがなぜ大切であるか、働くことの意義といったようなものを、遅ればせながら、しっかりと大学で教えていただきたい。本当は、そういうことは子どものときから教えていかなければいけないことですけれども、すでに大学生になっている者に対して「もう君たちは手後れだよ」と言ったのでは、これは大学が教育機関として、きちんと機能していることにはならないと思います。ですから、もし、不幸にして、まだそういうことがしっかり身についていない学生が目の前にいたら、しっかりそういうことを教えていただいて、卒業後、きちんと社会的・職業的に自立していけるようにして、送り出していただきたいと思います。ですから、この事業について、就職率が何％上がったかというようなことで評価すべきではない、と私は思っております。

そういうことで各大学、順調にスタートが切れたと思いますが、この先しっかりと取り組んでいただいて、皆さんの大学からは、社会的・職業的に自立できないような若者を、１人も出さないようにしていただければと思っております。本日はありがとうございました。

－（拍手）－

○司会　ありがとうございました。

続きまして、分科会Ｂの会場に入っていただきました見舘好隆様、お願いいたします。

●見舘　皆さん、どうもお疲れさまでした。

Ｂ会場の総評を私が言うのは非常に恥ずかしいのですが、私自身はすごく勉強になりました。荻上先生がおっしゃったとおり、この調子で皆さん、ぜひ成果に結びつけるように頑張っていただきたいと思います。

１つ、気がついたことがあります。この取組自身が、私たち教員、職員のＦＤ・ＳＤにつながることなんじゃないかということを、私自身が体感しました。私たちはいま、窮地に追い込まれているというか、これをなんとかしないといけないと思って、取り組んでいますよね。たとえば、学外の人とどうつながっていったらよいのだろうかとか、なかなか言うことを聞いてくれない教職員をどうこちらに振り向かせればいいのかということは、普段、こういう立場にならなければ絶対にやらなかったようなことであり、それに、いま、挑戦している状況だと思います。まさにＦＤ・ＳＤじゃないかなと思います。

先日、私はこういう研究発表をしました。「学生に、いわゆる『就業力』を身につけさせるために、教員に必要な能力とは何か」という研究発表です。

どのようにして研究したかといいますと、ＰＢＬを順調に回している 12 人の教員に「どんな力が必要ですか」と聞いたのですけれども、４つありました。

大きく２つで、細かくすれば４つです。

大きな１つ目が、「①課題をコーディネイトする力」です。それが２つに分かれまして、①−１が「プロジェクト・マネジメント・スキル」です。プロジェクトを本当にマネジメントする力です。それは、受け入れ先との交渉力や調整力。①−２が「受け入れ先とつながる力」です。受け入れ先との人脈がなければ、話のもっていきようがないので、やはり学外に常にアンテナを張っていないとだめだという話です。

２つ目の大きなカテゴリーは「②学生をマネジメントする力」です。教室では、あまりマネジメントする機会がないのですけれども、こういう課題になりますと、どうしてもマネジメントの力が必要です。②−１が、「ほったらかし加減」。あまり関与しすぎると成長しない。でも、あまり関与をしないままでいると、学生は何もしない。このさじ加減が、目茶苦茶むずかしいという話です。

②-２がやはり一番基本になる「学生の意欲をどう高めるのか」という問題です。
　これらの力というのは、「就業力」のみならず、私たち教員・職員の皆さんたちは常に身につけていかなければいけない力だと思います。
　私たちは大学同士で競争しているわけではないですから、ぜひこの機会を通じて、お互いにもっているノウハウを共有するグループワークのような機会をもって、常に情報を交換しながら、今回の事業の成果に結びつけていただきたいと思います。皆さん、この場で皆さん名刺交換をしていただいて、協力しあって、この事業の成果を出していただければと思います。それが結果的に、学生の成長につながっていくのではないかと、私は今日、感じました。皆さん、ぜひ頑張ってください。どうもありがとうございました。
－（拍手）－
○司会　ありがとうございました。

■閉会挨拶

○司会　本日は、本当に長時間、ありがとうございました。
　最後に、京都産業大学副学長であり、全学就業力育成実行プロジェクトのチームリーダーである柴孝夫より、皆さん方にご挨拶を申しあげます。
●柴　皆様、お疲れさまでございました。
　会議の開始から 270 分。学校の講義でいえば３コマです。３コマずうっと連続して授業を受けてきたのと同じです。学生にはこれを強要していますが、これはちょっときついなと感じました。
　でも、この半日、皆様方のお話を聞いていて、やはり情報の共有化は必要だなと改めて思いました。各校が抱えている問題は共通するところが多かったと思いますし、それぞれの大学固有の問題もありますが、それは即自分たちのところにもどってくるんだなということも感じました。
　荻上先生、見舘先生がおっしゃいましたように、この就業力育成支援事業というのは、１校で何％の就職ができましたよということを目指すものではありません。事業としては５年で終了しますが、たぶん 10 年後、20 年後に花開いてくるものだろうと思います。われわれの育てた学生が、10 年、20 年、社会でしっかりと働いて、生きていけるようにすること。これは、この事業にわれわれが取り組んでいく最大の目標だと考えています。
　それを成し遂げるためには、少なくともこの５年間、暗雲立ちこめているような感じもしておりますけれども、そこを乗り越えて完遂するという意識でもって、これに取り組んでいかなければいけないと思っております。そのためには、先ほど申しましたように、情報の共有がぜひ必要だろうと思います。これ

からも連携して、近畿地域としてはこのような会議を続けていきたいと考えています。

本日は、本当に長時間、ありがとうございました。私ども京都産業大学が主催させていただきましたけれども、なにぶん慣れておりませんので、いろいろとご不便をおかけしたところがございます。その点はどうかご容赦いただきますようお願いいたします。

またの機会に、皆様にお会いできることを楽しみにいたしまして、閉会のご挨拶にかえさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

－（拍手）－

○司会　皆様方にお配りしていますアンケートは、ぜひご回答いただきたいと思います。今後の近畿地域会議の参考にしたいと思います。また、これを機会に近畿地域で、就業力育成支援につきまして、皆さん方と交流できる機会をもてたらと考えております。

最後に、アンケートと名札を、部屋を出られたところのスタッフにお渡しいただきますよう、よろしくお願いします。

また、とくにメイン会場におきまして、机・椅子の移動にご協力いただきまして、どうもありがとうございました。この場を借りまして、事務局よりお礼を申しあげます。

本日は長時間、本当にありがとうございました。

－（拍手）－

閉　会